

## 鎮守の海としての坂越湾生島周辺海域

柳, 哲雄  
九州大学応用力学研究所

<https://doi.org/10.15017/27078>

---

出版情報 : 九州大学応用力学研究所所報. 138, pp.37-39, 2010-03. Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



# 鎮守の海としての坂越湾生島周辺海域

柳 哲雄\*<sup>1</sup>

(2010年1月29日受理)

## Sea Area around Iki-Shima in Sagoshi Bay as a MPA (Marine Protected Area)

Tetsuo YANAGI

E-mail of corresponding author: [tyanagi@riam.kyushu-u.ac.jp](mailto:tyanagi@riam.kyushu-u.ac.jp)

### Abstract

Sea area around Iki-Shima in Sagoshi Bay has been protected as a MPA (Marine Protected Area) for more than 1300 years. The reason of such long protection history is discussed based on the field listening.

**Key words** : MPA, Chinjyu-no-umi, oyster culture

## 1. はじめに

鎮守の森でその地の潜在植生がよく保存されていることはよく知られている。地元の人々が彼らの氏神が住んでいると信じる神社の森の木々には手を触れなかったため、例えば、西日本の鎮守の森では古来からの潜在植生であるシイ・タブ・クスなどの常緑広葉樹が保存されてきた。

同様に人々の手が触れない“鎮守の海”とでも呼ぶべき沿岸海域も日本には存在する。瀬戸内海東部播磨灘の北西部にある坂越湾の生島周辺海域はそのような沿岸海域である。

本稿では生島周辺海域がなぜ“鎮守の海”となり、現在もそう扱われているかを報告する。

## 2. 生島(いきしま)

坂越(さごし)湾は瀬戸内海東部播磨灘の北西部に存在する小湾である。坂越湾奥に存在する生島は、全島が対岸の坂越浦にある大避(おおさけ)神社の所有になっている(図1)。

生島は周囲1.63 kmの小さい島であるが、全島、人が立ち入ることは禁止されているために、島内の樹木は原生樹林の状態を保っている。その大部分はシイを中心とする常緑広葉樹で、蔓生植物が繁茂していて、島全体の植生が大正13(1924)年に国の天然記念物に指

定された。

大避神社は大避大神(秦河勝)・天照大神・春日大神を祭り、その創建時期は明らかではないが、播磨国総社縁起によると、養和元年(1182)年当時にはすでに当地で有力な神社であったらしい。

伝承によれば、飛鳥時代、聖徳太子のブレーンであった秦河勝は太子の没後、蘇我入鹿に迫害され、7世紀初期に畿内を船で逃れ、西航した。しかし、坂越湾沖で難破し、泳いで命からがら生島に流れ着いた。彼はその後、この島に住み、島の対岸にある坂越浦の開発につくした。ところが、大化7(647)年の彼の死後、坂越浦では天変地異が続き、これを恐れた地元民は、生島の中央部に河勝の円墳を造成し(図2)、坂越浦に大避神社を建立して、生島を神域として立ち入り禁止にした(図3)。

さらなる伝承によれば、江戸時代、赤穂の浅野藩は生島の材木を伐採して城内の建物を建立したため、そのたたりで浅野匠の守は切腹に追い込まれたと言う。今でも地元の人々はたたりを怖れて、後述するように生島に渡ろうとはしない。

## 3. 坂越の海運業

坂越浦(兵庫県赤穂市)は、明治中期まで北前船を中心とする海運業者の拠点として栄えた。海運業者は赤穂の塩を積みこんで坂越を出港し、瀬戸内海西部、

\*1 九州大学応用力学研究所



図1 坂越湾と生島



図2 生島内にある秦河勝の円墳

日本海で荷売り、荷買いを繰り返して、最期は坂越浦には貴重な石材を積んで寄港した。そして、それを彼らの航海安全の守り神である大避神社に寄進したのである。今でも大避神社主殿への石段は、長さ6 mにも及ぶ継ぎ目なしの御影石が積み上げられて出来ている(図4)

さらに、大避神社の絵馬堂には40もの絵馬が架けられている。特に、280年前の貴重な船絵馬も残されていて、昔から海人に大事にされてきた神社であることがわかる。江戸時代初期から始められ、現在は毎年10月第2日曜日に行われる同神社の秋の祭礼「坂越の船祭り」は、坂越浦の各町の持ち回りの世話で運営されているが、大阪の天神・広島宮島の宮島と並ぶ瀬戸内海3大船祭りと呼ばれ、平成4(1992)年には、国の選択無形文化財に指定された(図5)。

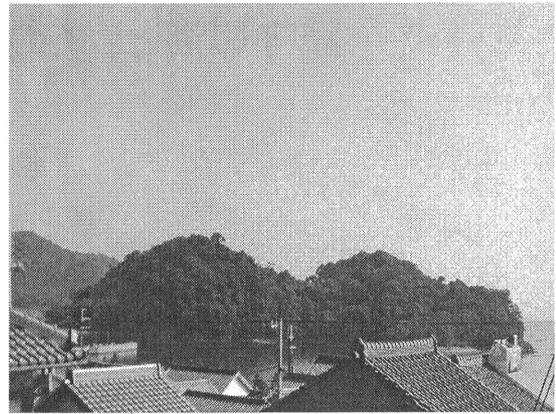


図3 大避神社から見た生島

図4 大避神社本殿前の石段。  
各段の御影石は1本石である。

かつては1000戸を超えた坂越浦の戸数も、海運業の衰退により、明治中期以降人口は減少し続け、現在は500戸程度である。そのほとんどは、地元中小企業のサラリーマンである。

#### 4. 坂越湾の漁業

坂越浦でわずか30戸に過ぎない現在の漁民は、20年前からカキ養殖に活路を見出し、坂越湾の南半分はカキ筏で満たされている。彼らは生島の鎮守の森から表流水・地下水と共にしみ出す栄養物質が坂越湾の豊か



図5 大避神社の絵馬と船祭りに使われる御座船

なカキを育てていると感じている。その意味では生島の原生樹林は魚付き林である。

坂越湾で養殖されたカキは、地元の海の駅にある直売所で販売されるとともに、レストランで名物カキ料理として振舞われている。

## 5. おわりに

鎮守の森を支えてきた人々の精神構造は、鎮守の森の木を切ると神からたたきを受けるという怖れの感情である。

今回の聞き取り調査で明らかになったことは、“鎮守の海”とも言うべき海の禁漁区や禁漁期間を守る精神構造も、鎮守の森と同様なたたきの感覚が必要とされるということである。

今回の生島聞き取り調査に同行して頂いた、地元の元兵庫県水産技術センター所長は、宮司が同行したにも関わらず、生島への渡航を最期まで拒否した。子供の頃から、たたきがある場所には絶対に行ってはならない、と親から強く言われていたとのことである。

里海創生のため、海に加えてはいけない人手のかけ方を、人々が順守するために、タブーに代わる新たな論理と感覚を、私たちは創生していかなければならない。

貴重な話を伺わせて頂き、生島に案内して頂いた大避神社の生浪島 堯(いなみじま たかし)宮司に感謝の意を表す。

なお本研究は(独)科学技術振興機構・社会技術研究開発事業「科学技術と社会の相互作用」による「海域再生(里海創生)社会システムの構築(研究代表者:柳哲雄)」の一部であることを付記する。